
亡き人を超えて(凍矢×小兎)

ルーラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

亡き人を超えて（凍矢×小兎）

【Nコード】

N1587B

【作者名】

ルーラ

【あらすじ】

少し冷たく、天然の入った凍矢と、一生懸命彼の心に近づこうとする小兎の交流話です。

煙鬼が優勝し、本人の宣言どおり三年後に開催された
『第二回 魔界統一トーナメント』。

会場も億年樹であり第一回の時とさして変わりも無い。
予選を通過し、本戦一回戦目を快勝し、

第二回戦目である凍矢の対戦相手は飛影であった。

「くらえ!!」

飛影が妖気を腕に集中させる。

「邪王炎殺・・・黒龍波あゝ!!!!」

その腕から魔界の炎の化身である黒龍が召喚された。

「くっ!!!!」

暴れまわる黒龍。

凍矢も冷気で対抗し善戦するがあえなく膝をついてしまった。

『勝者、飛影!!』

今回は実況役をしている樹里がパネルを見ながら宣言する。と、

『小鬼!!危なゝゝゝいゝゝゝ!!!!!!』

突如樹里が絶叫する。

観戦している全員が、マイク越しの樹里の悲鳴を聞いて耳を押さえた。

「イヤッ」

「!!」

ふいに悲鳴が聞こえた。

凍矢がその方向を見ると黒龍が暴れまわった後の反動で岩が崩れかけ、

実況をしていた女が巻き込まれかけていた。
黒龍の熱で朦朧とした意識の中でとっさに体が動き、
彼女を突き飛ばした後意識を失う。

岩石が自分に向かって落ちてくる。
女の頭の中には、

今では随分と昔になってしまった
崩壊していく暗黒武術会会場が一瞬脳裏をかすめた。
潰される！！

思った瞬間誰かに突き飛ばされた。

ドドーン！！ガラガラガラッ・・・
岩が崩れ落ちるものすごい音。

ああ・・・私・・・死んだのかな・・・

「え？」

恐る恐る目を開けると、目の前には先ほどまで戦っていた凍矢が倒れていた。

気がつくと森の中にいた。

そこは魔忍の里の、集落の周りを覆っている深い森。

魔忍の里は深く茂った森と両端を切り立った崖に囲まれている深い
谷間にあり、

見つける事自体が非常に困難な辺境の地にあった。

森には方向感覚を冒すと言われる特殊な霧が時折発生し、
気をつけていないとすぐに迷子になってしまう。

ここを住処としている自分たちにとっては慣れたものであるのだが、

よほどの事がない限り森に好き好んで出かけない。
中には変わり者もいるのだが。

それに当てはまる人物の事を考えながら、
しばらく歩くと樹齢何千年を経ているであろう巨大な魔界樹を見つけた。

かなり太い幹をしていて、根でさえ太い丸太を思い起こさせる。
木が立っている場所は里から離れていて、少し小高い丘になっていた。

懐かしい・・・いつの事だったろう？

その、丸太のような根に座っている誰かが見える。
側に近寄ってみると彼がよく知っている女だった。

彼女は目を閉じている。

眠っているように見えるが決してそうではないのだと凍矢は了解していた。

女の髪は長くて透けるような、艶やかなエメラルド色をしている。
その髪が風に自由になびいて、エメラルド色の柔らかない波を作っている。

それだけで綺麗な一枚の絵のようだと凍矢は前々から考えていた。

「・・・どうした？」

彼女は座ったまま、自分が来た事に動揺した様子もなく目を開けずに言う。

彼女は風。

この里でも最強の部類に入る風使い・・・
はっとして、自分は彼女を探していたのだと思ひ出す。

何となく、ここに来ればお前に会える気がしてつい足が向かってしま・・・

とは言えなかった。

「・・・ここにいたんだな。」

それを聞いた彼女が目を開けて面白そうに自分を見る。

「お前は、ここに来る度にそれを言う。」

それから彼女が何か言ったのが聞こえた気がして、姿が薄くなって・

「凧・・・？」

消えていく彼女を捕まえようとして手を伸ばして・・・。

「凍矢さん！？大丈夫ですか？」

凧とは違う女の声・・・

「うつ・・・ああ。」

目を開けるとそこは魔界の病院だった。

一気に夢の事は忘れられて現実に引き戻された。

目の前には自分を心配そうに覗き込んでいる、見覚えのある女が一人。

「お前は？確か・・・」

大会の審判だった・・・

「小兎です。以前もお会いしましたよね、

あの、助けていただいたてありがとうございました！！」

その言葉を聞いてそうだった。と唐突に思い出す。

戦闘後、巻き込まれそうになった彼女をかばったのだったか。

「別に。体が動いただけだしな。」

特別な事ではないと思う。

「小兎、試合はどうなった？」

彼女はそれを聞いて困ったような顔をした。

「試合はまだ終わってないんです。

今決勝でして・・・。眠っていたのは約二時間ほどです。」

「そうか。」

俺はまた負けてしまった。

ふと辺りを見回す。

「奴らはどこだ？」

確か、

自分が覚えている限りでは幽助以外のメンバーは途中で脱落していたはずだ。

「用事があつて皆様出てらっしゃいます。その間私が見ているよう言われまして。」

「そうか・・・。」

凍矢が答えた時だった。

「かゝつたく今回も煙鬼のおっさんが勝ったぜ。

ジジイはいい加減引退しろってんだよね。」

腕を頭の後ろで組んで、軽く伸びをしながら一番に病室に入ってきたのは幽助。

「お、凍矢起きたのか？大丈夫か？？」

幽助に続いて陣、蔵馬、死々若、鈴木がそろそろと入ってくる。

「ああ・・・。」

そう答えたものの体が熱い。頭がくらくらする。

「顔赤いべ。」

「熱があるんじゃないですか？」

「黒龍波の熱波に当たったな。大丈夫か？」

陣、蔵馬、鈴木と立て続けに言葉が投げかけられる。

「すまん・・・だるくて何もする気が起きん・・・。」

「まーな。あいつの黒龍波をあんだけ防いでたんだ、熱が出て当然だぜ。」

小兎、しばらくこいつ頼むぜ、俺ら待合室に行ってるからよ。」

幽助が小兎の肩を叩く。

「そうですね、俺達がいたら煩いですし・・・お願いできますか？」

蔵馬が相槌を打つ。

「は、は、はい！！！」

凍矢からは見えなかったが小兎は顔を真っ赤にして思いつきり返事をしていた。

「すまんな・・・。」

凍矢が熱のある額を押さえ、俯きながら言う。

「あぁっ大丈夫ですか!？」

瑠架が薬を持つてくるまでどうか安静にしていってください!」

小兎が慌てて自分に毛布をかけた。

突如二人きりになった病室。

彼らが出て行つてしばらく目を閉じてじっとしていると大分楽になつてきた。

身体を起こしてみても先ほどのような眩暈はしないし意識もはつきりしてきた。

「あつ身体起こして大丈夫ですか?」

側に座つていた小兎がおずおずと聞いてくる。

「あぁ。」

怪我よりも、飛影の放つた黒龍波の熱波に当てられたな。

と、凍矢は思う。だが、まだ動き回るのにはだるい気がしてしまう。

「良かったです。」

さっきの慌てたような表情から一変して小兎が笑顔で言う。

「ところで、凍矢さんの目標つてやっぱり大統領になる事ですか?」

「いや、そうじゃない。」

凍矢自身は魔界の大統領になることなど望んではない。

だが今の自分の目標が誰よりも強くなることである以上、

それは目指すべき目標の一つであるだけだ。

「え?ならどうして大会に・・・。」

凍矢は気の無い声で答える。

「強くなりたいからな。」

それきり口を閉ざしてしまつたので小兎は彼の目指すものが良く分からなかった。

「そうですか・・・あの、凍矢さんは人間界をどう思います?」

「人間界？特に何とも思わないが・・・」

暗黒武術会で行った事もあるし、幻海の下で修行していた時も人間界だった。

行き来が自由になった第一回トーナメント後凍矢たちは魔界に残ったのだが、

そう言えばあまり自由に周りを見る余裕が無かったな、と思う。

「なら一度ゆっくり行ってみるのもいいと思いますよ。」

私、働いてるんですが結構いい所なんです。」

「そうか。」

「・・・。」

「・・・。」

沈黙が流れる。

凍矢の方からは話しかけてくるつもりが無いのが分かって小兎は焦った。

「あのっ今は、どちらにお住まいですか？」

「癌陀羅だ。」

ああ、と小兎は呟く。

彼は第一回トーナメントが始まる前までは黄泉の配下だったから。

「では、皆さんも一緒にですか？」

「一緒・・・ではないが、お互い近くに住んでいる。」

小兎はすっかり困ってしまった。

あんなに会いたかった本人がすぐ目の前にいるのに、

質問して彼の事を色々知るチャンスなのに。

なのに少しも分かったような気がしない。

小兎は焦っていた。

「凍矢さんは、昔はどんな所に住んでました？」

私が住んでいたのは小さい町・・・って言うてもほとんど田舎だったんですけどね。」

この話題なら色々と話がはずめるだろう。

凍矢が首を傾げる。

「・・・森に囲まれた村だった。」

「わあ、きつと静かでいい所だったんでしょうね。」

焦った小兎の頭から、

彼の過去が決して明るいものでなかったのだと言う事はすっかり消えていた。

「凍矢さんて、子供の時はどうでした？私はいつもやんちゃだって言われてました。」

「子供の時？」

「は、はい！是非聞かせてください！！」

「・・・悪いが、昔の事をこれ以上話す気は無い。」

その言葉を聞いた途端、ひどく小兎の胸は痛んだ。

「あ、はっ・・・はい・・・そう、ですよね・・・」

ようやく彼が魔忍だったのだと言う事を思い出した。

自分がひどく情けなくなり、自然と涙が溜まる。

「小兎？」

彼女の目から涙が流れそうになっているのを見て凍矢は目を見開いた。

「ちよつと私、失礼します！」

「あ、ああ・・・」

凍矢はバタバタと慌ただしい足音をさせて小兎が去っていくのを見送った。

「おいおい小兎、どーしたよ？」

待合室にいた幽助が走りぬけようとした小兎を見つけて腕をつかんだ。

「わっ幽助さん・・・」

「どしたんだ？凍矢に何かきつい事でも言われたか？」

他の皆も小兎が泣いているのを見て驚いたようだ。

「いえ・・・あの、幽助さん・・・」

「あ？」

「私って駄目な女でしょうか・・・」

急ぎ足で凍矢のいた病室を出たけれど、外に出るまで持ちそうに無かった。

涙が自然にこぼれてくる。

「お、おい小兎？」

「せっかく幽助さんがチャンスくれたのに、私ったら無神経なことばかり言っちゃって・・・」
また涙を目に溜め始める。

「ことおゝつ・・・」

「すみません！ちよつと顔洗って来ます！！」

小兎はまた走って外に出て行ってしまった。

「小兎？あなたどうしたの？あ・・・」

待合室の外で声が聞こえ、小兎と入れ替わりに瑠架が通りかかった。

「あ！瑠架じゃねーか！丁度いいところに！」

「幽助さん、一体どうしたのですか？」

そう言ってチラツと小兎が行ってしまった方を向いた後、再び幽助に視線を戻す。

「実はな・・・」

かくかくじかじかで、と言いくそうに事情を説明する幽助。

「――っつー訳でよあ・・・詳しいことはわかんねーけど多分・・・」

「

「そうですか、分かりました・・・」

幽助の説明で大体の事情が分かった瑠架が一つ、肯いた。

「急いで追いかけます。薬、お願いしますね。」

「おうっ」

幽助が薬を受け取りながら頼んだぜつと付け加える。

瑠架は急いで小兎の後を追った。

幽助は瑠架に渡された薬を見つめて無言のまま、足音も荒く凍矢のいる病室に入る。

「おい凍矢、おめー小兎に何言っただ？」

少し怒りを含んだ口調で言う。

「・・・？昔の事を聞かれたからその事について、だが。」

突然入って来た幽助に第一声にそういわれ、

凍矢は訳が分からないなりに冷静に判断し彼の問いに答えた。

「昔の生活って忍時代のことか？」

「ああ。思い出したくもなかったんだが聞かれたしな。」

「・・・んで？」

「お前は聞く必要は無いと言った。それだけだ。」

「それだけって・・・。」

幽助は脱力した。

自分たちはもう慣れてしまっていたのだが、凍矢は元々言葉が少ないのだ。

「何でまたそんな事言っただ？」

「あんな生活はまともじゃないからだ。」

師が気付かせてくれなかったら俺は未だに闇の中にいただろう・・・闇の中にいる事自体疑問に思わずに。

「だから誰も聞く必要は無い。いや、聞くべきじゃないと思った。」

「はあ・・・。」

幽助がため息をつく。

凍矢に悪気がないのは分かっているのだが。

「何だ？」

大げさにため息をついた幽助を怪訝そうに見つめる。

「言葉が足りない。」

「は？間違っただろうが。」

「まーな。けどもーちつと言ひ方考えてやれよ。」

あいつ、おめーの事理解しようと思死なんだからよ。ほれ薬。んじゃ、ちゃんとして休めよ。」

そう言つて病室から出て行く幽助の後ろ姿を見送る。

「ああ・・・。」

自分に向かつて放られた錠剤を、用意された水で飲み込んだ。
水。

彼女の目から流れかけていたそれをどうしようもなく思い出させる。
しばらくベッドの上に寝転がっていたが、何故か気分が重苦しくなる。

ベッドから起き上がり、

このままにしておいてはいけないと思う気持ちも手伝つて彼女の姿を探し求める。

「小兎はどこへ行つた？」

皆が待合室にたむろしているのを見つけて聞いてみた。

「体はもういいんですか？彼女なら外です。」

駄目ですよ凍矢、女性はデリケートなんですから・・・。」

「うむ、女性を泣かすとはけしからんぞ。」

蔵馬、鈴木に同じような小言を言われるので黙つて聞くしかない。

「泣かせたくて泣かせたわけじゃない。」

「とーやにその気が無くてもきつと言ひ方きついんだべ・・・。」

「注意するようにする。」

それしか言えなかった。

蔵馬に言われた通り外に出ると広場に出た。

噴水のあるベンチに瑠架が座っている。

その隣に小兎が俯いて座っていた。

瑠架は小兎の背を撫でながら何かを話しかけていた。

その様子を見ながら、

放っておけないような気分になった自分に何故か違和感を感じる。

同じ妖怪とは言え、自分は女性に慣れていないのだ。

だが、自分が泣かせたのかと思うと胸の中がさわさわして落ち着かなかった。

声をかけようか迷っていると先に瑠架が気付いて振り返った。

それに気付いて小兎もまた振り返る。

「と、凍矢さん!？」

自分の姿を見て慌てた様に目を拭って立ち上がり、深く頭を下げる。

「さつきはすみません!」

「いや……。」

言ってから慌てて言い添える。

「おれこそすまない、どうやら俺は言い方がきついらしい。」

「とんでもない!!」

小兎が首をブンブンと横に振る。

「私ったら泣いたりして……恥ずかしいです……。」

「いいんだ。……隣に座ってもいいか？」

「はい!!」

凍矢が小兎の傍らに腰を下ろすと小兎もまた座る。

「瑠架すまない、二人になりたいんだ。」

「!……はい。」

瑠架はすぐに離れて二人の様子を見守る。

もちろん皆も一緒にである。

凍矢はしばらく話の糸口を探した。

小兎は黙って俯いている。

「……何故、泣いたのか教えてくれないか？」

「あ、いえ……もう大丈夫です。」

「教えてもらえないと困るんだ、知りたい。」

「……自分が……情けなくて……」

「情けない？」

「凍矢さんは言いたくなかったのに、私ったら無神経な事を聞いてしまったと思って・・・」
凍矢は少し目を見開く。

「お前は俺の過去を詳しく知っていた訳ではない。気付かないのは当たり前だろう?」

どうして泣く必要があるのか。

「でも少しは知っていました。ですから・・・失礼なことを言っしま、たと・・・」

凍矢さんに嫌われたかもしれないって思ったらつい・・・
言っているうちにまた睫毛に涙を溜め始める。

「泣かないでくれ・・・これではまた幽助達に叱られてしまうな。」
言った後、心の中で凍矢は苦笑する。

「?凍矢さんが叱られる事ってあるんですか?」
小兎が不思議そうに凍矢を見つめた。

どう考えてみても想像できなかったから。
「ああ。奴らは俺に容赦無いからな。」

「まあ・・・」

疲れたように凍矢が言うので、小兎は少しだけ笑った。

「凍矢さんは優しいんですね。」

「優しい?俺が?」

「はい、そうですよ。」

普通なら泣いて出て行った人をこうやって探してくれたりしませんから。」

「そうなのか?・・・お前は変わっている。」

「え?あ、あはは、やっぱりそうなのかな・・・。」

切なそうに言うので凍矢は慌てた。

「そういう意味じゃない。そんな事は言われた事がないから驚いただけだ。」

「?そうですか?・・・では私が最初に言ったのですね。
ですが皆さんは口に出さないだけできつとそう思ってたっしょいま

すよ。」

凍矢は小兎が微笑むのを見つめた。

「・・・お前は、何故俺を理解しようとした？」

幽助に言われた事を思い出して、ふいに聞きたくなった。

「え、ただ・・・凍矢さんの事をもっと知りたかったのだ。」

突然話題をふられて、小兎は何を考えるとという事もなく素直に答えてしまった。

心のどこかで、こうやって話せる機会はないかとも思ったせいかもしれない。

「今のは冗談か？」

心の中で首を傾げる。

何故俺なんかを知りたいと思うのだ？

「あ、あの・・・冗談では無いです、本当に・・・」

凍矢さんがどんな事を考えて、何をしてらっしゃるのか気になるんです。

えっと、凍矢さんにそんな方はいませんでしたか？」

小兎は慌てて話題を変える。彼に聞かれると何でも素直に答えてしまっからだ。

「陣や、幽助達の他に？」

「はいっ。」

「・・・。」

少し考えて、凍矢の頭に浮かぶのは一人の女。

透けるような、艶やかなエメラルド色の髪、同色の翡翠のような瞳に尖った耳。

自分をいつも母の光のような、温かい視線で見守っていてくれた彼女。

陣の師であり、強く美しく・・・そして優しい・・・今は亡き先代の風使い。

「いたが、もういない。」

凍矢の声が自然と低くなる。

「そんな、すみません！」

「気にするな、随分昔の事だ。」

「ひよつとして、凧さんて方ですか？」

彼がうわ言で呟いた名が頭に浮かんた。

自信は無いけど恋人のはずはない・・・と思う。

そう思いたかった。

「何故知っている？」

凍矢は少し驚いた。小兎が彼女の事を知っていたとは思えない。

彼女は有名だったけれど、その名を知っているのは闇に生きる者達だけだ。

「ごめんなさい、寝言が聞こえてしまつて・・・。」

「そうか。」

申し訳なさそうに言うのを聞いて、心の中で苦笑する。

寝言を言うなんて珍しい事だ。

「もしかして、その方は忍のお仲間ですか？」

小兎の言葉を受けて頷く。

「ああ、陣の師匠だった風使いだ。」

「そうですか。あの、女の方・・・ですか？」

「ああ・・・女だてら異常に強い奴で、

修羅の中でもあいつに敵うものはほいなかった。」

目を細めて、どこか自慢げに言う凍矢を小兎は見つめた。

その話し方の端々から彼女に対する信頼が見えた。

「尊敬・・・いえ、その方の事をお好きだったのですね。」

少し声を落として小兎が言う。

（凍矢は凧が好きか？）

かつて陣にも聞かれたな・・・と凍矢は苦笑する。

だが、その時は何も言えなかった。

自分自身、

何となくそうなのかもしれないと感じてはいたのだが確信は無かったから。

今は・・・

「好き・・・か。」

「あ、その・・・」

まずい事を言ってしまったかと小兎は一瞬焦ったが
凍矢は一つ頷いてあっさりと続けた。

「そうだったんだろうな。」

多分、とても。

「え？もしかして気付いてらっしゃらなかったのですか？」

小兎が不思議そうに自分を見つめた。

「ああ。あいつが生きていた当時は、

そう言う感情を表現する言葉自体を知らなかった。」

魔忍は自分の感情を表現する言葉を多く知らない、使う必要も無い
からだ。

もちろん今は違っけれど。

「・・・よく分かったな。」

不思議に思っ着小兎を見つめる。

「はい。凍矢さん・・・凧さんの事を話す時、とても嬉しそうでしたから。」

「そうか・・・。」

「今も、ですか？」

「それが、そうでもない。・・・あいつを思う気持ちは変わらない
が、

その気持ち自体が少し変わったんだ。」

言って、凍矢は一つ頷いた。

「え・・・？」

「随分前に夢を見た。陣も偶然同じ夢を見ていた。

・・・その夢の中で、俺と陣はあいつに側にいて欲しいと言った。
そうしたらあいつは謝ってきたんだ。」

「まあ・・・。」

本当に不思議・・・と思う。

この世に存在しないはずの者達が夢に出る。

そう言う例を知らなかった訳ではないけれど、二人同時にとは珍しかった。

大抵何かを伝えるために出てくるのだと聞いたことがある。

「『自分はもうお前たちに何もしてやれない。・・すまない。』つてな。

考えてみれば当たり前だ、あいつはもう死んでいるんだからな。」

ふと、凍矢の目に淋しさが宿ったような気がした。

すぐにそれは消えたけれど。

「それから俺と陣に、自由に、幸せになるよう望んでいた。

少なくとも俺には、陣や俺があいつに未練を残すことを嫌がっていたように見えた。

気持ちが変わり始めたと思うのはそれからだ。」

「はい・・・。」

「だから俺は、自分が望むように生きようと思った。

いや、魔忍でなくなってから既に自分で望むように生きていたと思う。

凧がそう言ってくれたおかげで自分が間違っていなかったのだと再確認できた。」

「凍矢さん・・・。」

「一時はどうなるかと思ったけどよ・・。」

幽助が二人の様子を見守りながら言う。

「何とか今のところは順調みてーだな。」

「本当だべ、凍矢が女の子にあんな気を遣ってるとこ初めて見ただよ。」

陣が面白そうに言う。

「うむ、違いない。これで凍矢にも春が来るかもしれんな。」

鈴木の後軽い笑いが一同の間に起こる。

凍矢は話題を切り替える。

「今度はお前の事を聞かせて欲しい。人間界でも働いているそうだが・・・？」

「あ、はい。何とかですけど・・・皆さん良くしてくださいます。」

「どんな仕事をしてるんだ？」

「そうですね、テレビの司会をしたり、スポーツの実況をしたり色々です。」

「そうなのか？」

だが、人間界への行き来が自由になったとしても差別や偏見はあるだろう？」

人間達が妖怪の存在を公式に認めていないと言うのは凍矢達も知っていた。

妖怪でもそうだが、異質なものに対する冷酷さは人間も劣らないと聞いた。

暗黒武術会のように闇の世界でならともかく

公の場で働くのでは大変だったのではないだろうか。

「はあ。でも、なじみすぎちゃって誰も私達を妖怪だっと思っていないようですよ。」

小兎がしてやったりと言うように笑う。

実際、自分たちが妖怪なんだと言っても人間達は本気にしていないようだった。

「達？」

「瑠架と、樹里も一緒なんです。三人で一緒に働いてます。」

「ほう・・・？」

凍矢はしばらく小兎の仕事の話の聞き役に徹していたのだが、ひと段落着いた時には

彼女達が人間界にいかにも上手に馴染んでいるかを知って感心していた。

そして頷きながら言う。

「なるほど。お前にとっては、魔界より人間界の方が居心地がよさそうだな。」

妖怪であるのだから、

妖怪の世界である魔界の方が住み心地がいいのではと凍矢は思っていた。

しかし人間界の事を話す彼女は生き生きとしていている。

「す、すみませんっ。」

小兎が慌てて謝ってきた。おそらく自分の考えたことを感じ取ったのだろう。

「責めてるんじゃない。」

「そうですか？」

小兎は彼の顔を見つめる。確かに怒ってはいないようだ。

「ああ・・・俺は、好ましく思った。新しい世界にうまく調和して生きる、

自由な生き方もあるのだと。」

「そ、そんな立派なものじゃありません!!」

そう言って顔を真っ赤にして首を横にブンブンと振る。

凍矢はそんな彼女を見つめた。

目は心の窓・・・と言う言葉を突然思い出した。

「お前の目は綺麗だな。」

目を見ると、大抵の奴の考えている事、

そして今までの生き様の大まかな事は分かってしまう。

だが、小兎の目はかげりが無く澄んでいる。

「はい？」

訳が分からず凍矢の目を見つめる。

自分を見る凍矢の目が心なしに柔らかくなっただような気がした。

彼の言った言葉を思い出し、褒めてくれたのだと知って顔が熱くなる。

「いつも一生懸命何かを成し遂げてきたからだろう。」

自分が魔忍であつた時は自分で何かを目標を定め、
一生懸命成し遂げると言う事は無かつた。

命令に従わされ、自我を持つ事すら許されない環境の中で生きていた。

一生懸命目標を持ち、

達成する喜びを感じ始めたのは魔忍で無くなつたつい最近の事だったから。

「そんなお前が羨ましい。これから変わらない事を祈る。」

「はい！！」

そう言つた小兎の顔はこれ以上ないほど赤くなつていて。

それでいて俯いて、嗚咽を堪えようとする。

彼の言葉が嬉しかったのだ。

一方凍矢はすっかりうろたえてしまった。

やはりこれも、自分が泣かせたと言うことだろうか・・・

「？小兎、その・・・」

「すみませんっ。」

言つた後、手で顔を覆うので困つてしまう。

凍矢は考えたあげく震えている背を撫でてみた。

「ごめんなさい！ま、また私つたら・・・」

再び謝るので更に困つてしまう。

「いいんだ。」

「・・・凍矢さん・・・」

背を撫でているだけでは何だか心もとなくて、
ふと瑠架がやつていたように抱き寄せてみる。

すると凍矢にしがみついて来た。

しがみつかれるのは予想外の出来事で困惑しているはずなのに、
温かくて不思議な気分がした。

「ごめんなさい、もう少しだけ・・・こうさせてください。」

小兎が自分の胸に顔を当てたままかすんだ声で言う。
だから彼女の表情は分からない。

「謝る必要は無い。」

そう言つて撫でてやるといっそう強くしがみついてきた。

ああ・・・と凍矢は思う。

自分は光を手にしたと思っていたし、今ではそれを手にしたと思つていただけれど。

もしかしたら。

もしかしたら今のこの温かさこそが光の温度なのかもしれないな・

・

と、ふいにそう思った。

（後書き）

凧とは「OBLAT」というサイトにある「Beyond the time」と言う小説に出てくるオリキャラです。作者様の了解を得て使用させて頂きました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1587b/>

亡き人を超えて(凍矢×小兎)

2010年10月20日19時07分発行